

## はじめに

目的をもった軍備には、今も昔も10年間でひとつの単位であると考えられる。維新後、日本は約10年間で国産小銃に統一し、20年間で世界の一流技術を採用し、同時に列強との衝突が避けられないことを認識し、30年後の1896年、「三十年式小銃」、装具、その他兵器を制定し（一部「保式」）、1904～5年の日露戦争に備えた。

## 目次

- ① 三十年式兵器の定義
- ② 三十年式小銃
- ③ 三十年式銃剣
- ④ 三十年式弾薬盒、銃剣差
- ⑤ 日本の6・5mm弾薬
- ⑥ 三十年式兵器の生産とその後
- ⑦ 意義



写真1 三十年式小銃2挺、歩兵銃と騎兵銃

## ① 三十年式兵器の定義

三十年式兵器は火砲から小火器まで、10年後の日露の衝突を想定し開発、1896年に制定されたものでその中には「保式機関銃」（ホチキス機構）も含まれていた。

実際、三十年式は日露戦争の主力兵器と装具となった。

多くの兵器は1905年、明治38年に改良され、「三十八年式」兵器となり、1945年までの日本軍の基幹兵器となった。

日本の兵器開発と生産は、19世紀末の「三十年式兵器」で、欧米水準と同等性能と評価された。

## ② 三十年式小銃6・5mm

6条腔箋、モーゼル型こう棹、鉤型安全装置、5発弾倉を備えた小銃で、歩兵銃、騎兵銃が存在した。当時の欧米小銃水準に引けを取らない性能であった。

有坂 成章氏の開発で、爾後、日本の小銃は「アリサカ」と呼ばれた。

諸元

	口径	全長	銃身長	重量	表尺	腔箋	さく杖	弾倉
歩兵銃	6.5mm	1275mm	795mm	4050g	300-2000m	右6条	748mm	5発
騎兵銃	6.5mm	963mm	480mm	3300g	300-1500m	右6条	415mm	5発



写真2 こう棹部分  
後の三八式小銃との違いはこう棹部分で、安全子が異なる。

20世紀初頭の欧米主要国近代軍用銃口径は7・5mm以上で、日本、イタリア、オランダ、スウェーデンなど一部の国が6・5mmを採用した。当時の常識では、このような小口径弾丸は人間を倒せるのかとの疑問も出されたが、日本は敢えて、命中率・携行弾数の利をとった。(現在の世界の主流は5・56mm)

日露戦争の観戦武官によれば、この銃の実戦での評価は高かった。

なお、銃床の合わせは、匍匐使用を考えてのことで、木材が足りなかったためではない。あり溝で木を合わせた手の込んだ工作だった。

しかし、実戦での使用では、大陸の過酷な気候、特に銃腔内、遊底に入る埃や異物に悩まされ、爾後日本の小火器技術開発の課題の一つになった。当時の写真で見ると機関部に手ぬぐいなどを巻いた兵の姿が見られる。



写真3 塹壕で三十年式歩兵銃を操作する日本兵

### ③ 三十年式銃剣



写真4 三十年式銃剣初期型

二十二年式小銃は短く、銃剣も短剣型で、武道熟達の限られた兵には扱い易かったが、日露戦争は多くの動員を予想し、一般的な日本兵、欧米人に対し小柄な兵が白兵しやすいことを目的に採用された。

三十年式小銃にこの銃剣を装着すると全長は170cm以上になった。

また日本古来の刀剣形を踏襲した片刃で、樋が入られている(英国、インドの銃剣にわずかにこの形式のものがあつたが)。銃剣だけでも十分に戦闘できる大きさであった。

当時、刃は白磨き、鉤型鐔(フックガード)であり、この銃剣は後に黒染め、直鐔に変化した。九九式小銃にまで多くの日本の小火器に共通で計830万振製造された。

諸元

全長	刃長	重量	鞘入り長
512mm	398mm	690g	525mm

#### ④ 三十年式弾薬盒、銃剣差



写真5 弾薬盒、銃剣差を付けた革帯（かくたい）

革帯の前に2個、後ろに1個、計3個の皮革製の弾薬盒を配する形式で、小銃を肩に当て左手で支えたまま、右手で左右の前盒から5発載装弾子を取り出し、銃に装填した。蓋は開け易いように前に開いた。

前盒には装弾子6個、各30発、後盒には12個60発、総計120発を携行した。

6. 5mmに小口径化したことにより、携行弾数を増やした。

銃剣差は革帯の左に位置し、小銃を左手に垂直に立て、右手で抜き、装着した。

若干の変化はあったが、三十年式弾薬盒などは大戦終了まで日本軍歩兵の基幹装具であった。

銃剣差は銃剣の鉄鞘を差込んで上部を帯で固定する皮革製の装具である。

#### ⑤ 日本の6・5mm弾薬



写真6 日本の6・5mm弾

左：後期型 15 発

右：左は擬製弾

日本が採用した6・5mm弾は銃の腔箋が6条の期間は先端が丸く、4条になり尖頭になった。5発ずつがバネの入った板に納められ、小銃のこう棹を開け、上から押し込んで装填する形式だった。この装弾子は使い捨てであった。

諸元（単位mm、g）

口径	重量	全長	薬夾長	縁径	基部径	弾丸長	弾丸重量	装薬量	縁種
6.5	76.6	21.5	50.8	11.9	10.6	33.2	10.4	2.11	半起縁

三十年式小銃の6.5mm弾薬では、距離300mを「射撃開始」基準としていた。

#### ⑥ 三十年式兵器の生産とその後



写真6 三十年式小銃の支給

小銃、銃剣は小石川小銃製作所（現後樂園）で生産された。

生産数は1905年まで約60万挺、振。

内訳は歩兵銃約55万挺、騎兵銃約4万挺。

三十年式小銃のその後は一部が学校教練用に払い下げられ、残りはロシアなどに輸出された。この際に菊紋は綺麗に消去された。日本に残ったのは儀式用に滑腔にした少量のみだった。

その他、日露戦争では三十年式馬具、三十年式野砲、保式機関銃（1898年）、三十二年式騎兵刀、砲兵刀、拳銃は二十六年式輪胴拳銃が使用された。

三十年式兵器の多くは、日露戦争が終結した1905年、改良され三十八年式兵器として制定されたものが多い。

## ⑦意義

日本とロシア、兵器装備の差は、日本は日露戦争で動員した全兵力に同じ形式の小火器を自国で生産し配備したことだ。

ロシアはモシン・ナガン小銃M1891、7・62mmが主力であったが、国産では生産が間に合わず、外国に製造を委託したが、前線では各種の小銃を使用した。

その事実をみても、明治天皇は「戦争は嫌だ」と言うお考えであったが、現実、戦争は避けられないと日本は全力をあげてその準備をしたのだった。

それが衝突のおよそ10年前であったということは、時代をみる、先を考える力があつたからだ。

## 参考文献

須川 薫雄著 『日本の軍用銃と装具』 1995年 国書刊行会

須川 薫雄著 『日本の機関銃』 2003年 JW社

中原 正二著 『火薬学概論』 1983年 産業図書

青木 保著 『兵器読本』

南部 麒次郎著 『或る兵器発明家の一生』 1948年 天竜出版社

山縣 保次郎著 『小銃と火砲』 三省堂

銅金 義一著 『銃器の科学』 海山堂

桑田 悦、前原 透著 『日本の戦争・図解とデータ』 1982年 原書房

佐山 二郎著 『日本の大砲』

工華会編 『兵器技術教育百年史』 1972年

大江 志乃夫著 『日露戦争と日本軍隊』 立風書房

ケン・エルク著 『日本の弾薬』 2008 ソロ出版

ラリー・ジョンソン著 『日本の銃剣』 シダーリッチ出版

フレッド・ハニーカット著 『日本の軍用銃』

山縣 保二郎著 「小銃と火砲」昭和5年 三省堂

生田 淳著 「日本陸軍史」 教育社

ジョン・エルク著 「機関銃の歴史」

ドルフ・ゴールドスミ著 「マキシム機銃」

諸兵射撃教範 昭和14年